

武里団地

(埼玉・春日部市)

巨大団地に 飛び込んだ学生が 作り出した新しい食卓

埼玉県春日部市にある武里団地に大学生が移り住んだ。高齢化が進む巨大団地の活性化のために大学生は食を通じた交流イベントを開催。団地に新しい食卓を作り出した。

特記以外の写真：大塚俊
取材・文：船木麻里



2012年10月の「ふれあい喫茶」には地域住民と学生が130人以上集まった



「第2回隣人まつり」

テーブルのあちこちから、もんじゃない焼ぎの香ばしいソースの香りが漂ってきた。

「まあ、おいしいじゃない!」
「そうですか、よかったです!」

「あれ、なんか焦けていない?」
「もんじゃない焼ぎはちょっと焦げるくらいが旨いんですよ——」

こんな高齢者と学生の和気あいあいとしたやりとりが聞こえてくる。埼玉県春日部市にある武里団地の集会所一杯に明るい声が響き、笑顔が広がった。

2012年7月に行われた「第2回隣人まつり」。団地に入居した学生が企画した地域住民との交流イベントだ。参加者は30人ほど。6〜7人でテーブルを囲み、おしゃべりしながら「焼ぎそば」と「もんじゃない焼ぎ」を作った。

「もんじゃない焼ぎなんて食べたことないからいらない!」と敬遠していた団地住民の関口京子さん。気がつく、「今度は私がやる」とヘラを持ってもんじゃない焼ぎを作っ

ていた。「やってみたら意外と楽しい」と顔をほころばせ、人生初のもんじゃない焼ぎに舌鼓を打った。

「若い人との会話もごちそうよね!」初めて出会った人とても、食卓を挟んでワイワイガヤガヤできて最高!。そんな参加者の弾むような言葉に、準備段階から不安と心配を持ち続けていた12人の学生の緊張は、次第に解きほぐされていった。同時に、参加者に喜んでもらえたことのうれしさと、「やってよかった」という充実感がこみ上げてきた。

(写真:春日部市)



第1回隣人まつりでは、餃子を焼いて交流を深めた



もんじゃ焼きと焼きそばを作った第2回隣人まつり。若者と年配者が一つのテーブルを囲む

(写真:春日部市)

学生が団地にやってきた理由

1966年から入居が始まった武里団地。最盛期は2万人を超える入居者がいた。ただ、最近が高齢化が進み、入居者は1万人を割るほどになっている。

地元春日部市がこうした問題の対策の一つとして、UR都市機構と2011年度から取り組んでいるのが「官学連携団地活性化推進事業」。武里団地で地域貢献活動を行うことを条件に、移り住んだ学生に家賃などの半額を助成するという制度だ。2人以上のルームシェアでの入居も条件だ。制度を利用して、2011年9月に2人、2012年1月に5人の学生が入居した。

「一人で食事をするより、大人で食べるほうが数段おいしい。」
日本工業大学4年 金子康信さん



「アは、就職して寮生活をするときの練習にもなりますから」
2012年1月に入居した泉水俊哉さん(埼玉県立大学保健医療福祉学部3年)も、「団地から大学へは自転車で行けるし、将来は理学療法士になりたいので、高齢者と接する機会が増えれば仕事にも役立つのでは」という期待もありました」と話す。

食を通して生まれる自然な会話がお互いの距離を近付けてくれます。
埼玉県立大学3年 泉水俊哉さん



手探りの地域貢献活動

大学の活動で平日は早朝から夜遅くまで団地にいない生活の中、団地の高齢者に喜んでもらうために何ができるのか。金子さんが通っている日本工業大学の建築学科・佐々木誠准教授に相談した結果、決めたアイデアが食を絡めた交流イベントの開催だ。

「分りませんでした」と振り返る。



(写真2点とも:春日部市)

隣人まつりだけでなく、理学療法を学ぶ学生が体操を指導するイベントも開催

金子さん自身、「食事は一人で食べるより、ルームシェアしている友だちも含めて大人数で食べるほうが数段おいしい」と感じていた。それなら、高齢者と一緒に食卓を囲むイベントをやれば交流が深まるのではないかと考え「隣人まつり」を企画した。

1回目は2012年1月に実施した。メニューは「餃子」。学生と高齢者が一緒になって餃子の皮で具を包む。慣れない手つきで皮と格闘する学生に、高齢者が「こうするんだよ」と教えたり、小籠包みたいなオリジナルの包み方を披露したりした。でき上がった餃子を食べるころには会話も弾んだ。

「第2回隣人まつり」には、1月に入居した泉水さんら3人も加わった。5人の日程調整がつかず、準備や話し合いは難航したが、メニューを「焼きそば」と「もんじゃ焼き」に決め、武里団地自治会からもアドバイスを受けながらプランを詰めていった。

若者たちからパワーをもらうことができました。
団地にお住まいの 宮澤八重子さん



若者が頑張る姿を見てとても感動しました。
団地にお住まいの 関口京子さん





イベントが終わるころには、すっかり仲良くなっている



最初は緊張しましたが、やさしい言葉をかけてもらって、気持ちが楽になりました。

埼玉県立大学3年
松下耕平さん



とってもうれしい。私たちもパワーをもらえるし、若い人も人生の先輩から、何か得るものもあるかもしれませんね」と満足そう。学生たちも学ぶものは大きかったようだ。入居当時は地域貢献活動に対する義務感から緊張して構えていた学生たち。2回の「隣人まつり」で活動に対する意識も変わった。

イベントを通じて顔見知りも増える



「あなたたち若い人がいるだけでいい」という言葉をもらって、肩の荷が下りたというか、すごくラクになりました(埼玉県立大学3年 松下耕平さん)。「高齢者に何かしてあげようと気張るのではなく、食を通して自然に生まれる会話から、お互いを知り、交流を深められることが分かりました(泉水さん)。「今度ウチに食べにおいでよ」と言われてうれしかった。こんなところから交流がもつと広まるいいですね(金子さん)。学生たちは今、次のイベントに向けて、新たな試行錯誤を始めたところだ。

地域の住民にも変化が起きた。学生が企画したこの「隣人まつり」をきっかけに、自分たちもコミュニケーション活動を開始したのだ。

毎週水曜日、団地の中央集会所に集まり、コーヒーやお茶を飲んだり、トーストを食べたりしながら、気軽にしゃべりする「ふれあい喫茶」というイベントを自ら立ち上げたのである。

高齢者の方々の好みに合わせるため、何度も試食を繰り返しました。

埼玉県立大学3年
原田翔平さん



第1回はあまり宣伝をしなかった反省から、ポスターを作成。自治会の協力で500枚ほど張った。すると前売りチケット30枚は即完売した。ただ、5人の一番の不安は、「もんじゃ焼きが高齢者に受け入れられるのか、高齢者の皆さんが本当に楽しんでくれるのだろうか。自分たちの気合が空回りしていないだろうか」ということ。そこで、休日に5人で団地内を歩き、高齢者に話しかけて暮らしぶりを聞いたり、開催1週間前に数人の高齢者を招いての試食会

も開いたりした。「自分たちはおいしいと思う味付けも、高齢の方にはしょっぱいと感じるということを教えてもらいました(埼玉県立大学3年 原田翔平さん)。その情報を生かすため部屋で何度も試作品を作っては食べ、味見を繰り返してレシピを決めた。

若い人がいるだけで楽しい

苦労と試行錯誤の甲斐あって、「第2回隣人まつり」は大成功。参加者の宮澤八重子さんは「若者と食を通して交流が深められるのは嬉しい」と笑顔で話す。「武里団地の住民ではないけど誘われて来たら楽しくて。今は毎週、電車通いです。新しい友だちもたくさんできた」と喜ぶ80代の女性もいる。「ふれあい喫茶」には地域住民だけでなく、近隣大学の学生も授業の一環として参加することがあります(広がついて)。

「隣人まつり」をきっかけに、住民同士の交流が活発になりました。

自治会長の石塚凱祥さん



最初はぎこちない会話も、食事を通じて自然体に